

ねずみの冒険

小川未明

青空文庫

一匹のねずみが、おとしにかかりました。夜中ごろ天井から降りて、勝手もとへ食べ物をおとしにいく途中、戸だなのそばに置かれた、おとしにかかったのです。空腹のねずみは、あぶらげの香ばしいにおいをかいで、我慢がしきれなかったものでした。ねずみは、そのせまい金網の中で、夜じゅう出口をさがしながら、あばれていました。夜が明けると、ねまきを着た、この家の主人が、奥からあらわれました。

「大きいねずみだな。こいつだ、このあいだから、そこらをガリガリかじったのは。」
主人は、しばらく立つて見ていました。

「どうしてくれようか。」

ものぐさな主人は、自分の手で殺さずに、ねこに捕らえさせることを考えました。それで、ねずみの入ったおとしを下げて、外へ出しました。

寒い朝で、路の上は白く乾いていました。前側の商店の小僧さんが、往來をはいていました。

「大きいやつが、かかりましたね。」と、ほうきを持つ手を休めて、ながめていました。
「ねこは、どうしました。」

「ねこですか？ さあ、どこへいったか見えませんよ。」

「こいつをどうしようかな。」

「水の中へお入れなさい。」

「水の中へか。」

主人は考えこんでいました。バケツに水を入れなければならぬ。おとしの入る大きなバケツでなくてはならぬ。それから、死んだねずみの処置もしなければならぬ。いろいろのことが頭に浮かんで、めんどろくすくなくなっていました。

「バケツに水を入れて、つけたらいいでしょう。」と、小僧さんが、いいました。

「それがさ、やつかいなことだ。外へ出して、なぐったら死ぬだろう。」

「それは、死にますがね、ふたを開けたら、逃げやしませんか？」

「それもそうだ。よほどうまくやらなければな。」

こんな話をしているところへ、あちらから、自動車のブウ、ブウという、警笛の音がしました。ものぐさな主人は、即座にいいことが思いついたのです。自動車にねずみをひき殺させようとしたのでした。

「これは、名案だ。」

主人しゅじんはぐるぐるとおとしを、ふりまわして、中なかのねずみに、目をまわさせました。そして、自動車じどうしゃが近づいたときに、ちょうど車くるまの下になりそうなどころを見みはからって、ふいに、ねずみを出だしました。

驚おどろいたのは、ねずみよりも自動車じどうしゃの運転手うんでんしゅだったのです。正しょうたい体のわからぬ、黒くろいものをひいてはたいへんだと思おもったのでしよう、にわかにはハンドルを曲まげて、避さけようとなりました。だが、あまり急きゆうなために調子ちょうしが狂くるって、片側かたがわの店頭てんどうへ突つ込んで、ガラス戸どを破壊はかいしたのです。

主人しゅじんも、小僧こぞうさんも、ねずみどころの騒さわぎではありません。そのほうに気きを取とられている間あいだに、ねずみは、どこへか逃にげてしまったのでした。

助たすからぬ命いのちと思おもったねずみは、また天井裏てんじょううらのすみかに帰かえることができました。しかし、ねずみは、これによって、人間にんげんというものは、自分じぶんたちのとうてい考かんがえつかぬ不思議ふしぎなことをするものだと思おもいました。とにかくここに長くいてはいけなさと感かんじたのです。ちようど、この屋根やねから、裏うらの空き地あちを横切よこぎって、あちらの倉庫そうこの屋根やねへ、電燈線でんとうせんがつづいているのを発見はっけんしました。

「そうだ、この電線でんせんを渡わたつていけば、あちらの家いえへ、移うつることができるのだ。」

ものぐさの主人を、てこずらせるほどの、元気なねずみですから、電線を渡っているところ、冒険を決心しました。

人間が気のつかない昼ごろのことでした。ねずみは、一本の電線を渡りはじめました。落ちそうになると尾をくると針金に巻きつけて、体を支えました。

鳥や、動物のすることは、人間のごとく、そうしくじりがないものです。しかし、だれもいないと思ったのがそうでなかった。空き地に勇くと賢二くんが、すずめをさがしていたのです。しかも打つことの上手な賢二くんは、空気銃を持っていました。

「あつ、ごらん、ねずみがあんなところを渡っている。」と、先に見つけたのは、勇くんでした。すずめが電線に止まっていると思ったのが、あにはからんや、ねずみでありました。

「ねずみがこんなことをするかなあ。」と、賢二くんはこれを見て、むしろあきれていました。

「賢ちゃん、打つのは、およろしよ。」

「ああ。」

賢二くんは、これを打つのはなんでもなかったが、ねずみのこの健気な冒険に対して、

じやまをする氣持ちになれませんでした。

「渡つたら助けてやって、おつこちたら打つといいね。」

いさむ

勇くんは、こういいました。賢二くんは、だまつて、ただ、ねずみの渡るのを身動きも

せずにじつと見守っていました。ねずみは、おどろくべき注意力をもつて、とうとう

渡りおわつて、あちらの赤い屋根へつきました。このとき、思わず、二人は、手をたた

て、ねずみのために、成功を祝したのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

初出：「小学四年生 17巻12号」

1940（昭和15）年3月

※表題は底本では、「ねずみの冒険《ぼうけん》」となっています。

※初出時の表題は「鼠の冒険」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年1月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ねずみの冒険

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>